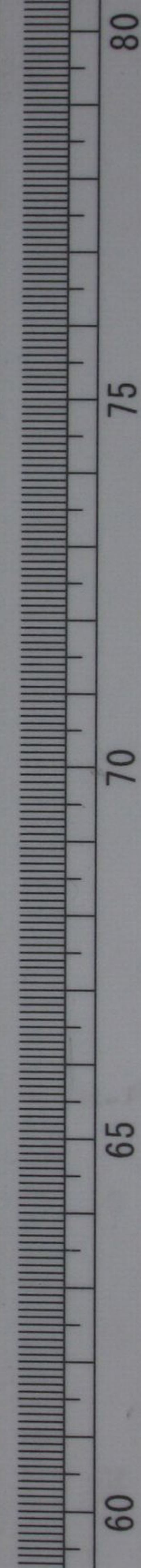




中村俊定文庫

文庫 18

828



序

俳諧者。國歌之一體。見古今集所載。猶
是三十一言之什。非夙然別調者也。若
夫今之俳諧者。不知始於何人也。考司
馬貞史記索隱引姚察云。滑稽。猶俳諧
也。命名之義。蓋出于此。而其截三十一
言。為十七字。雜以方言俚語。詞氣諧謔。
別為一體。殆亦國歌之變調耳。天正間

中村
俊定

百橋

守武宗鑑以下。諸家輩出。哄然為之。而後始漸行于世焉。厥後好尚各異。而支分派別。其究不能無弊也。迄芭蕉翁以別才獨造。首唱正風。其徒相與上下。以風靡海內。而後益大行于世焉。夫古今諸家。風尚互別。體裁數變。則其源流宗派之辨。與彼名姓爵里之詳。此俳諧家所當考究不置也。往時白雄房著名家

序一

錄一書。歷舉百餘家。以詳悉言之。於蕉翁則併揭其書目。以提其要旨。記其及門有名之徒。以論其失得。此亦俳諧家所當珍玩不置也。今茲友人確嶺翁將校刊貽世。徵序于余。蓋先人嘗好從事於此。而余亦以過庭所聞。嘗好為之。則翁之有斯舉。使先人在。固將喜而序之。而余烏可得而辭其請乎。遂援筆而書。

文政庚寅嘉平月朔

藁齋主人山部孤濁撰



志需

岡山鳥書

序二



誹諧名家録

春秋菴白雄編著
小篁菴確嶺校訂

一 日本流傳のちりあ天のうた橋のりててうた
 女神男神の山歌とて題あり 後河許六番代滑粘音傳の
 倭武尊あおさるはくそれ山歌をさうあとい
 松原貞徳あとい世の
 凡そあはれちあとい 日あめと風とせむさのそめはせむさ
 とあめさうりさうさうはさのゆめあつれと和歌乃
 起り連歌のちりあにさう流傳ふりあ附の和歌連歌
 のちりあれさといらんたあて流傳を和歌連歌のそ
 うれぢさうめ流傳もされまきさうあとい あとい
 是成用也
 紀氏古今集に流傳あまきさう文體明辨に流傳
 体の詩二首ありあといよそ名ふゆ和とさうといも流
 傳の發白連白といふ荒木田守武支那宗流と題る

とあるを

定家々後後の告白

ちる并紙遊うまきくけ嵐也

この外一休律師長有法師の護白ありと

其裡不たいし

一 後後の字の説きしと

一 紀氏杜氏にりあるまにり

芭蕉翁生前尤後後の字用ら

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

芭蕉翁奥地所には

の古境は隣に

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

一 後後の字用らと

守武

伊勢内宮神職長官之位荒木田氏天正二年八月
八月卒年七十五字治隆のちる守武の社あり

後想猶吟千句巻頭

未うあやうあゝ〜も神のま
猶吟千句にまひるれ〜もあ洛の月桂
連立の〜武の海とらうきんたやと開ひまよひさる
う〜ゆらのたひのまうあて歌をまゝたさう〜と
答ふ式いま〜あま〜そけ歌をまゝる〜

元日や神代の〜もありの〜も
ま柳の眉り嵐の 顔了南

あゝあゝあゝ〜
ちろる花を南を海院伝と中あ〜

終命の曉
秋歌にりあ〜えあらん家世の

碎世のあ

あ〜う〜もま〜ちりまも非路心
〜の松風〜

世の中百首巻頭

世の中お能に孝ある人〜あ〜
何よはまき〜もたの〜〜き〜あ
連る

雲む〜ゆ〜ん〜綱やあ〜らん
あ〜あ〜あ〜ん〜ら〜ら〜の声

〜よ〜やあ〜ら〜ら〜ら〜ら〜は〜
行より〜もあをほれ〜た〜孫のふ〜
あ〜あ〜の〜ら〜は〜た〜う〜〜用〜ん〜ら〜あ〜〜程〜と〜あ

ひらつこうきりるを和分の造人連分の巻者統
從にかのゝゝ組あり

一 宗 鑑

振員尼の傍の住支那派之郎入道して同國山傍に
住居する大はくして集撰者

ひらひら入集りて統撰するものをもと
漏しきり化あらやう一巻の著書

これす武の飛梅よりもとてをうら
ひらひら入集り

え田比るるものよせん不費の心
て非のうりまうたる花もあ
もをはくして歌中なる 蛙 了然
ひらひら入集りて田よびつたあまを

連也

ちあひひらひら入集り
大五の國もたふし田ひら
このもを竹ふすまの田の
たれむし

まのゆよめんきん備のち
えはくしりて徳をうら
よりのみをとめる 高 人
まらふしりあうらまを金備

山崎菴の額

上客 その日ゆり
中客 一紙とま
下客 二紙とま

其白か雪の陸尾の響たかき

ふくまきくと萌くとゆの糸

夏の甲子ゆくとあせをうたはる

徳和志良もをうゆる 業 平

荒のりや修月ら進し一寛永年中や板倉
周防と殿以勤役の長二条川地ふかおとく
付らる地玉の大仏のうと一はれうとらなり
お貞徳言下の白をぬり板はあまめ廊は
うそ作者のあをあるさくそのひとつとて
あまに

あつる火くそ川のせまうの灸うか
うへ木屋にせうん紫ちね林五月

年の矢の鞆の店にせりよと

荒のもとの地玉の冥子にゆらうとら名
強うとあ一の丸家とらふ菴ゆりうの海す
むとひうとあや

荒のりとのあとい貞室これとうき多ゆり
はとあて後貞怒子ゆり貞怒の附小ゆり
うとあはたりと

一 西武

山本氏洛壬生子位を貞徳の人
くまき くとまき 油中袋 木撰集

壬生に位せし比埒の内は版はくふりめをゆり
まうすも古祝をゆりうた峯ののまはは
あひし壬生形とて重宝とて

貞徳翁より人丸の像をよみ長式をあらわれ
從真坊より附註並心武のちりあ

耕 其の影の程よく試みるうね
兜 梅あつふや文殊普賢像
同よりうんそまにんやそ秋の風
拵とそふちや息杖をよのま

一 立圃

又画をよくと京童といふ多不記自画

ちる長とよや云紫のうさり繩
うる一あそそ花あうそはしの山
不き垢離やうくも雪の流川

野の口親重入道一と落子位を貞徳門人之
可小難屋立圃とよふの士とよと 花火草あふ撰集後

一 維舟

又退善稿吟九百貞善臥
雪とよき一あとのひうそ和子能如来

松に重頼入道一と落子位を貞徳門人之
毛吹草あふ撰集後
花はあふやや紫の 桐の棒
す 風やひまのあふ人をあふたれ
巡れの推とるやもく夏中か
長壽よき

未給帆やめろく一松も雲の峯
淡林の白

峯入や雪に起るを中あり
長壽よき 淡林の白

一 貞 室

安原正章入道一洛小位正貞徳門人
たけの湯屋喜左衛門これに

中年より一統後に住ひ一とせ如賀の山中の温泉
あまの湯まじりてや又ま周とのみのに知られ
物洛の後貞徳門人となりあまの湯まじりて
道を行とせりあまの湯まじりて判切の料
を生涯まじりしと

とまじりてとまじりて花のよりの山

あまの湯まじりての湯やまの雪

あまの湯まじりて

あまの湯まじりての湯やまの雪

此のるはゆりて生涯書をまじりて紙綴冊をまじり

うら買を焼きまじりてまじりてあまの湯まじりて
綴冊をまじりてまじりてあまの湯まじりて
あまの湯まじりてあまの湯まじりて
あまの湯まじりてあまの湯まじりて

曙の歳まじりてとまじりてまじりて

後冷泉院の山内とまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて
まじりてまじりてまじりて

うら買を焼きまじりてまじりて

送 ちの山内のあまの湯まじりて

けるまじりてまじりて

よのゝあはれ

えい

朝霞や日まけふよけて鼻ひけ

貞室のさきしー鼻ひけさる男ありしー

あつらひしーさきしーあはれは流のひら

あつらひしー

一 安 静

馬淵氏宗畔まのけと貞徳門人

西向やと糸も歌くや田のそあ

けぬまのしーけぬまのしー

一 良 徳

雞冠井氏まのけと貞徳門人

まの夢やあつらひるほと重源花

一 望 一

あつらひしーまのけとまのけ

まのけと貞徳六才

西武 立圃 維舟 貞室 安静 良徳

け六士より道さあしーにこころ

伴野山田佐松田氏古伝ていとの名ある貞人の
あつらひしー西武宗聖を学ば

ねのつらつら 笑も心証や園の外

去年よりのもさやしーまのけと今朝の美

それとまのけとまのけと身もこころ黒羽

天神奉納 獨吟

うめあつらひる菊の枝さ 此所との

まのけとまのけとまのけとまのけと老松

一 梅盛

高瀬氏伝心よりよみ貞徳の門人と
洛子修を撰集より

長宗なるひるまの雀の羽を伸て

よち心也や舞ももつたも欲のち
ねちにきこくふくさらん噴喙の鮎

本巻十の稿吟巻頭

花ひとも岩ふもあたらるも程成

外山の裏あちの野辺近

いぬる丁も刀日のうきもたしもれそ

一 季吟

北村氏江及北村の産之洛不伝し後江都子位
貞徳老後の門人なり拾穂軒とよみ

歌学に長し歌書不細抄せざるなり

綱吉公御代息湖春とともに関東めしきされ
編五下石多まつり所歌学研を伝付られ法眼
に任ん其孫なりそのあち新玉は島の別あたり
しらめし出さるるよはるる二男正立不新玉
はしゆの別當をせぬる

埋木 増山の井 あらひ流書あまの撰と
此氣ぢい地ぢに歌書のくかしを去るその
あらゆるくかあまのむら

地さあらしあのるは花の於らあ
あまのくくあまのくか彼のの内侍や

籠めうらのま羽をほくゆりしを
まも氣のうきあまのらん 黒羽

おんくしとおんくし〜 龜 祭

そせ成を牌

おんくしとおんくし〜

連る

あは葉略〜く人端の体
秋や〜た門や花鞠を〜るん
おんくしを〜葉の〜めさ〜ん
〜〜を〜い〜我あり〜の浦よ

麻屋氏に都子位
は戸判者の秘あり 塚社丹花老人の事

う〜る〜むる 暮の一日やと鈴の妻
め〜る〜りや雲の影通る石和川

一 徳 元

一 玄 札

あまもみお初や火籠のふら落る

回文

ざらめ〜いせり菊の莖の〜め

成田氏の戸の位醫師の事
〜の判者あり

四十二の〜〜〜ざらめ

ゆり〜る〜あま〜い〜葉際十二神

一 未 得

石田氏江戸の位を判者く

葉子や〜の〜る〜の妻
〜は〜は〜判者との〜玄札未得二人の
あり徳えい未得の門人らは〜ら〜ん

一 慶友

泉沢壘の位之判者也

一 紫ハナツ 相意成ナリト云レテ

徳元玄札未得慶友のふきつひ月廿の判者也同日も
徳元はひつひく牡丹花をくを御とせ

玄札未得本といふも

可の中より取らぬこれのありと云ひ

いふことなきくあしき友了也

夏の書ははらひのふきんあきん 徳元

あきんをうらふは花小き川 友 慶友

きつひのふきんをの垣根の掃除して 玄札

一 兼始

奥沢岩城の産之江戸に住て岩城兼始と名宗

一 將監

美濃の産岡田氏
といふ名あり

月々あはれなるものありてあはれこゝろ
あはれはあはれものよき門の戸よ
こゝろのくは岩城兼始はそりて
多くの人あはれとひらきし
と落書しあはれはあはれと云ふ
はらひこれのそのあはれ漏りをうらたり
といふ人いふは福也

ひらきせは遊楽へあはれ
はらひあはれはよきと云ふきたれもの者
とあはれとされり

あはれにらぬらとさうと 移也
所をさきや楓のうらめども
尾花の風ふあま神の 庵
月夜ふい踊と人をも催し

一 貞怒

大井氏誠前敦賀の産
後江及大津に住し貞室門人とも

許六曆代滑誓傳に英の本に貞徳貞室貞怒
と接て貞怒にいつて絶たると書たりきまの
つら花のめとい実ふふゆらとつらと山本
西武遺書にいつらに畧け

あまに生さ花とくもさる が

連句

遠くいゆ〜今秋の盗人
道をもふつりまゝ馬の糞
このもより大津の馬糞とらふ名成とらふ
又舟武宗監とま真とらふりのつら流り
〜〜〜
〜〜〜

その頃のち

うつきま〜移あとい啼や不如帰
ゆめもさやあそ前中に大井川
ゆ〜ま禁のはくま成つととらるゆ不名を
種物をとり〜移あは後人の首成 別家乃
あ〜い一白のゆ言成〜あ〜

ふのち樂なるものもあつてさうして所よち
のまじり

白くさくや二十の番の花の足

二十九の元四に

まじりたるは伊ません先の(まじり)
はくのちの(まじり)を云々せん(まじり)と(まじり)と
や(まじり)と(まじり)と(まじり)と

連る

はく(まじり)とある 踊(まじり)と(まじり)

圃あつて(まじり)雀の(まじり)と(まじり)と(まじり)

やの(まじり)はく(まじり)に圃踊に雀(まじり)と(まじり)と
まじり(まじり)と(まじり)と(まじり)と(まじり)と(まじり)と

一 宗因

一 守武宗理によひ貞徳貞室の流と
り(まじり)も蕉風よ(まじり)と(まじり)と(まじり)と
り(まじり)も(まじり)の流に(まじり)中(まじり)の道
す(まじり)と(まじり)の(まじり)途を(まじり)と(まじり)と
越(まじり)と(まじり)と

浪華の産後洛西山よ位西翁とよみ
又梅翁とよみ 護林流後の祖と

天満天神月並連致の宗因たる(まじり)と(まじり)と
梅ん(まじり)と(まじり)と(まじり)と(まじり)と(まじり)と
まじり(まじり)の(まじり)と(まじり)と(まじり)と(まじり)と
あつ(まじり)と(まじり)と(まじり)と(まじり)と(まじり)と
後(まじり)の(まじり)章(まじり)真(まじり)木(まじり)に(まじり)の(まじり)ある(まじり)気(まじり)色(まじり)は

獨吟

故より大派房さきよめ入
うきき砂子の危のまき
酒ひらたき多きにぬ出
はむりまそれのきの
川あらしけ聖の花き
うきまき中虫の啼らん
井掛ひにうきまき
あめ心梅さめか
護林十百負巻額
はまに淡林のああり梅の花
正信移りまきまき

一 松意

これこそ松意のめら
由平の遊軍はまき

江戸子位を宗園を振き
まき松林のまき

護十百負より新撰の松林
変化をあらわす此附一統
まき

然くや春の若き
香おやむり
まき

うきまき
おのめけん
一鉄
正友

く津路くや丸天下のちこまこみ
美を端んでまらぬわし言の声
栗賣女ももももや外の色
いさねも人の中とせんふさくら
宇周勝子
聖柴

ゆわもももらぬ馬の脊おろれ

連白

香薷教めしあけられて山境せま
あけし猿人こ伏の夏
並松のまきまきし馬中らぬ
磯うら波のささくみはな
頑城をあらしむら後まきりきり

一 常矩

洞の窟をくふさいの目

田中氏洛小位と季少門人へしう後後抄
こやの借林まきくこのまう門人へ

五百頁巻頭

地く助り恨みの清や毒の暮

とくふ白をせしより人地く毎宗道てこよみ
うも借林風くしあももももめの色わわまの
ふさり陣の谷くまもく竹うしうのらわあ
山きりまら谷とねしはさそあわし竹うまら
ありわし

花ありく犬のうあぬもあし
うもまを外かおしと月を

連句

詔下詔や引くもあつらん厚み
杖はくそくそ 雪形のみ
木枯やゆゑ老魚を喰はらん
羽をりまきま 雪山実あつたの時
と戸柵よききき 小の東風
曉 鰯 鱈 尾の巻の引裂く

一 高政

江戸浅草小塚 江戸浅草小塚の名あり
赤坂に在

都よりん小桶に 鯉 花う川
糸 雪のつらつら けりん 乳川
江戸 踊子白巻頭

一 弘氏

皇代氏伊勢の神職と
修林の令とありてよまの名あり

人石力も花も 子禁もあつたを
祝類 喜た 中納言 ちの

連句

子代のもつり 産の神くら
圃くくく 雪のふ 強

あつたまきん 雪のふ 杜 雪

素心もも夏は 雪のふ 雪

雪小修林あつたを 雪のふ 雪のふ
雪のふももあつたを 雪のふ 雪のふ
雪のふももあつたを 雪のふ 雪のふ
雪のふももあつたを 雪のふ 雪のふ

長与のゐる京に都浪荒ちもに符節をあて
せしころとくしつらふれ於都ともにもに
あはれ
あつて仇復滅亡の時長とくありけり

その下縁可小まきとちのさく

非礼よ二千の林檎高も如し
とつゆともや戸立山のさぬは登
ゆふらやふおあよあうく浪上戸
とそ月れ夫おああり横債の草を靡
うめあまうし一の歌よとらうのうよ丁

連白

まきうとくも溝より少お掉さくと平
功華名とらとく後挺退く

一 信徳

侍の追逃むらろ松多程とく
そのゆかあふらう鶴立あつと
心古らうちをまきしつらとくね
つめよ立子番う西風をよられ
天道や人道や女道 悪道や
さつとらうしきの借張あつ又累
殺平跡もあんな敵のさうあ
愧美甲あつとくをよ上よ列と

貞徳の古風うし徳林にうらとく風林のころを
長まきしつら隠士伊豆氏

白蓮花廬山の法師らとく
めの名の章真や坂台のゆ中

連句

梓のうに産駒をうけ
柿秋に流翠か途一とある
夢子雀潔のひくたを仕りたり
あしめを引くくする賢人

正風体

雨の日や門控くけり杜若
唯もやとくひ生るるもあらん
羊のくは女ぬ服清き一や

山口氏より始節と云はるるの後の信章と云
深河の隠士と

蕉翁をともくく信林より後正風みあそふ

一 素堂

蓮を愛し一巻紙に池あり可小素堂の十蓮
と海夷造の十句を好むる也と

はらうるやと洋るをふふとの毎
有のふふ吟田舎谷の三瀬川

正風体

秋松奥やまきととされい夢の夢
多ら紫巻け蓮風情とくらん
雄をあら仙の菖のとさるが

一 言水

比田氏紫菫軒とよみ
都小住也

風の果のありきき海の音
けりよと人吟く風の言水とよみ信林と

まやう正風にうたりたるもあつたあふく
葵草あつれさきくも牛の角
子乙女のえん子けり柿のうくさうか

一 湖、春

北村氏季吟家副と
流後堂とよみ

慄り息くくさうの着るあめのか
て地乃もぬくくぬくは雨うな

一 鬼貫

撰及伊丹住
ひらうくと其外撰集より

正風よはくくくく蕉菴よ敵くくあつたのこく
されと氣滅後梅く梅をくむらうくと又十と
骸骨のうをねあはえんうな

ひらうくと本菴くときく秋の立
そつてしあひく

今日の秋よひらあひく親よ近

一 女磨

椎木氏松笠朝とよみ
浪菴の住と

こもも鬼貫にひらくくあつたく滅後菴とよみ
あつたくくくく

月窟よ堂くくくの志あひくく
妻の顔にえくくくく小山伏

一 立志

高井氏和後堂とあひく都の住と
三代とも立志とよみ

淀みやけんくくく交る杜宇

一 來山

夫れりよ母の乳をのむ無憂
小西氏湛翁とよみ
徳翁の住あり

初おとつらあらそよ秋と遊み
あきさうやまこ十月のふゆり

一 任口

伏見西岸寺

赤糸の仏号一神そ有
啼るのそ虫の飛るの交せり

一 玄梅

南都の住

ての川飛里のそねがじ

一 清風

このむしお復ひあきさむ落さそ
奥及尾翁沢の産
ひらも一撰者也

奥の細道よ清風の富るののまれともがさ
ひらうららとまきり一おのそ

一 明水

廣井氏洛外住人

むらさきの中を流し一巖繩
あのはらうらうら木くさのほれ

一 晶

芳賀氏
江部子住人

生き浦帰帆

りれ芦のむ糸ひらり 小入帆加
深川の伏又小似くりりの海

一 忠知 江都の住

え四甲何ふもろん 頼あしき
白岩の中うぬむりの雲の板
信徳よりききまきかきし 信を云風に通し
くくぬまとの余二十余仙江都八百負ひの川
ちしきぬしきあまひまきし 統士うきく
ととともあうんはく 高名ある城志あひ

誂諧名家録卷下

一 桃青 伊賀上野藩中之松尾甚七良宗房様と軒と字

入道しき江都深川に住人味く芭蕉菴と
稱せむしきものとせ成を茶亭に人なきし
也と松尾の洪水に今もせ成亭はあといはら
あしき修契にありていし養虫菴よと無名菴
伊賀上野小再び菴と味亭はりき名亭の
古柱をいひたるなり
浪義にありていし金銀亭なるあり坂のありに
を建之に忍石山にありていし知位亭今義仲寺の

境内に再建は枝葉浮花のたうらふに
風を宿とよみあひし播及姫洛は山陽の風羅
堂なり

元禄七年十月十日浪花橋居にあはる終余年
五十二歳遺骸は江沢栗津義仲寺に埋む

其南終命記にうらうらに畧す

前後名風出しあひある撰集松青二十餘仙
のこゝ奥の細友撰ありとてそのもろくその名
をあらうとあひある戸八百負ひとてその栗
多し如日美の目その外は船門人の撰と
著りしは因縁李吹の門人とあひある
の流はいとたひある松林にも好むあひ

庭訓の往來ありも桐より明の美
内裏離人形天王の御宇うらま
あま苦く偃鼠は喉をうらませり
連也

小蒲園は大蛇のうらま鱗形
疾のめしはあふとあふ中
居合ぬきあひの九やうらま

拙者苗あひ風の藤魚
終は松林の号風をうらまなり船恒の家集子
美の詩集をうらま齒牙に啼ひその揚をうらま
好くは風獨あひの此翁松林中奥山とあふ
る既天下一統せり

貧山の釜におよそ煮あがり 寒しし 冬
穢子も煮候にきき 遠く舟あらしん 観水
廬山の松上雪の舞の昼あらしん キ角
寒く食の日後人多きとに飢はらしん 藤白
さらしきの舟の角もむざととりて 友吉
おしし啼く海濱ある丸庭うらみ 雷虫
朝の換梅をさきとりに見え東さし 嵐雲
連る

美を屋美女 杯をひみ投て
あひくろ如し柳のうら
おのぼれお道おとあひささあらし
雪さししの記り

一 冬の日 荷今 越人 野水 重五 杜国 木撰之

連る

あかししの舟の林 祿に似たるうらみ
にたしと痛をちきるちかからさふ
あはしうらみあしあし

一 初懐紙

小三若にさうつふせらせむとてうま

鶴百頁とむの解百頁とむい
くち五右衛門の解ありキ角撰

うさよふせまふむしうさよふ

晨响ふやううら鳥帽子あうるん

後さおれ後あううらふれあうけ

まけあう眉をかきんまきぬく

強勸の堂にかもひうらぬ

ちう川さうお清い落きる茶の中

一 熱田三教仙

集ありしう海世とてふ
龜温たうきこ教仙あり

笑人のううらあうむううう海

一 春の日

振夷の舞あうあれ舞と身を従て

一 一うんひらうう茶のさあ

暮れ二又二日とらたる目を完て

連向に舞のあうとてあもあの日はまて

龜温たうきこ教仙あり

古池の中 舞とてあうむあうのさ

傘張の後あり故郷のやううら

連向

重五

中さうえいしんあう骨気あううあ

傾脚 靴をかきと 晨の宵

旁折あううう人あうううあ

一 続虚栗

キ角撰

美もや、山吹白く、菖蒲く、
ねりり多し、夜白の圃乃中ぬらん
望令や、鬻女も移るひの糸さらん
柳あはれは、ももく、さへあもぢく、

連句

傘拵志多し、君り多成とみ
漸くく、みくく、髪のおもやうに
月明く、まねく、この榎のはぢや
人ひれお、く、森ええ、ぢく、

去来

去来

去来

去来

一 曠野

荷兮撰

うめの花りの氣に、らぬ氣さうか
秋ひとくも、丹う、ねも、建れて、葉ぬ、お
夏のおおや、焚火、ふ、あ、あ、あ、と
湯堂の夕日、お、お、お、お、お、

連句

泉、お、く、て、帛、お、に、は、む、お、ん、く、み
りの、お、り、ひ、居、る、神、子、の、り、の、え
人、ま、く、く、の、ま、く、く、の、あ、あ、ひ、ける

越人

荷兮

景

泉

一 猿義

去来凡兆撰

さ、川、あ、く、は、猿、も、小、義、と、や、く、は、く
う、う、く、も、ぢ、く、て、圃、う、川、林、葉、う、を、

去来

下系やきほむく人の扱の函 九兆

連句

命うきうき撰集の妙は

きまゝにふくむるたる意をうて

うきまの果れは如小断之

此附小の果れは如小断之

去来文中子部尚白よりもその門下すく

たより松表候小く

一 奥の細道

曾良をとりあひ歌ひ

奥羽紀行

夏草や共とりり夏乃あそ

と水浮や西小西抱り孫ふの夜

一 出羽五歌仙

集のまことととも奥の細道の附出羽よ
てりりし出仙とその内一巻流津と集よ
出るとあるあり

あゝ流や位後下とてめての川

濤紙ぬちききりやや雕鳳の巢

此附陸奥の等羽羽の流丸不玉加賀の北枝あ乎

等ねよひ奥羽之紙の流士とく門下とむ

初場のまへに 嘆る 山吹

夷を強しセツの年の力石

あひあめる丁を懐ふのまを重く

あひあめるの夜強くくすせく

一 ひきこ

膳所曲翠正秀珍碩木撰之

一 深川集

巡礼死る 道の場 空
何よりも帰のうはくろ 哀せらる
然れんてとてと 泣あひきき
手束る 紀の冥守りかこくるに

洒堂撰珍碩り名状あるたあし
に戸にさうて集まりし由深川集とよみ

青くてもも所々きめの成さうと
せんろくにあそめのはくさうか
はくろむる 滝や十夜の場の力

連白

ころら中からも 狐鼓打 毒ふ
山伏をきくくくきく 冥のあ

一一

別坐鋪
はくきの系

枚風エラム
不トエラム四季甲八番白合

と後ひりて後いあ〜 夜世の中
孫うもあ 燧灯 去あは 氣あし
伊さ〜くろ 深川の末
あ多れは 少に 妻 逢きき
ろろ〜めま〜と 立たる 息とろも
よ輩がらんはくき〜し 記りよ 深川集まよ
変化を 西とん 貞徳翁の 古風より 後林の流り
あつ〜 正風ふめとろ〜 女 天下 一統せ 蕉翁
の丹誠あほ〜とろ〜 此道 不持 小輩 深く ちりひ
あ〜とろ〜ひあ〜

一 義津免

キ角エラム

一 義の法由

一 其帛

全 嵐雪エラム

一 浪花集

浪化エラムとある山ありそ海の二冊

一 虚栗

野坡利牛 孤屋エラム

一 一摺

推然 エラム

一 赤表紙

清風 エラム

一 枕表紙

一 枯尾花

一 翁滅後撰集

一 心法をひし

未定表 但質上野専芝の孫今所持
未定板翁枕表紙のうらせられ一集あり
今東都松露菴に秘す
キ角エラム翁終命の一集あり

一 岬峩日記

去来エラム

一 岬の古文庫

史邦エラム

一 岬の古文

露川エラム

一 岬日記

志考エラム

一 續猿公義

沾圃里圃エラム

一 岬小七歌集とりのりのありそその物にそとくくも
元禄土年の梓ゆえ

一 蕉翁の元禄七年孫令行そ七歌の料小ありそまや
とこの小亀燈とそとくまきのあ歌もそもひ歌もそも

一 夕兄弟

キ角エラム

一 ちとりの掛

鉄叟エラム

類掛子
雲みどり
泊船集
とせん白撰
陸奥島
扁突
韻塞
宇陀法師
風俗文撰
白扇集
皮籠摺
湖東問答

キ角エラム
嵐竹エラム
風田エラム
全
桃隣エラム
季由エラム
許六エラム
全
全
全
團友エラム
全
許六エラム

許六エラム 去末の巻をあらわす

こころせ草
東菅
庭の巻
三日月日記
葛の松原
放鳥
本朝文碎
此外 東の集
白陀羅尼
新百負ホ
蕉翁生子の趣小似る
いそる 笑渡風小落のあかとあるる 東朝文碎

即叟エラム
露沾エラム
立詠エラム
支考エラム
全
朱拙エラム
支考エラム
雲の集
枕首途
猿首途
古今集 三足猿
あまんの集 支考の撰
か類るり

工齋 山店 暮四 李里 秋風 友吉 知足 加生 一千 一笑 好春 鞭石

江都住

勢及鳴海千代倉氏

京三住

和及産之ゆきし記り不病に倍行氏
加賀ノ産之

春澄 彫棠 晚山 遠水 曲翠 東須 東藤 社因 荷兮 越人 野水

江都住

膳所藩中

牛角ノ親之

尾及

三及伊良虞住之

旧名古屋藩中

旧名古屋

全

路通
木因

坂住
美濃住

此五十六後翁の勳をさすくわんく

重五

尾及

舟泉

尾及

允兆

京住

且藁

尾及

智月女

大津乙別り母之

曾良

信及諏訪産はとまぐ後命翁與羽倍行

乙別

大津

史邦

美濃住とる珍碩とる

洒堂

女

不卜

伊勢国者一有妻後江都住蕉門判者之

李由

江及坚田住

許六

江及彦根藩中森川氏五老井とる

木節

大津住医之

士芳

伊賀上野住

猿雖

全

雪芝

全

卓袋

全

岱水

全

露川

尾及名古屋住月空居とる

諷竹

浪花の住とる之と道と云

露沾 舍羅 支考 惟然 木道 吞舟 沾德 排隣 輒士 卧高 探志 冰花

奥及岩城住

浪花住

美濃住 獅子菴

とくぬ素牛とよふ

翁生涯相見るといふも木道さるめいと新みん

浪花住

江戸住 蕉門判者

蕉門判者

蝉吟 探丸 卜宅 溪石 依之 夕菊 清風 等窮 落梧 一髮 胤禪 呂丸

伊賀上野藤堂家老臣

今蟬吟息

江都住

出羽尾花沢住

奥及スカ川

美濃住

尾及

今

出羽住

孤野幽朱全普風祐園近万昌
屋坡泉拙峯船文甫風之平圭

全浪花 全豐後 全江戸 全全全 伊賀上野 伊賀 全

昌聽兩龜配汝野重浪小北不
碧雪桐洞力村童行化春枝玉

全全全尾及 伊賀 翁生前相見 出羽住 越中住 全 加賀金沢 出羽酒田住

翁生前相見

一 晨松 胡車半良 式竹二 尤吾
井風吾 及來殘呂 之戶水 次中

尾及

全

全

全

伊賀上野住

美濃

尾及名古屋

京都

沾路游 銳泥似 如蚊冬 羽傘利
蓬健力 可足船 泉足文 笠下牛

尾及

全

尾及

浪花

已百千野及及野千已
川徑肩町水枝嶺筋指園圍

美濃

膳所

長廿寺

尾及

全

美濃

美濃

室生氏江都

江都

鷗步長虹雪固紅^女羽子^女塵破^女筮似^女友^女一^女槐^女
市桐五似筮文珊紅固雪虹步

美濃岐阜

尾及

全

伊賀

尾及

江都

津島

尾及

伊賀

全

里東 挑妖 車庸 涼菟 野明 怒誰 耕雪 支梁 水札 吕夙 畦止 不角

膳所

加賀山中

伊勢神風館 團友齋

出差哉

膳所

美濃

豊後黒奇

越中

浪花

江都添眼十翁之傳

馬莧 冬松 李風 古梵 山川 神叔 若風 裾道 乃龍 句空 杏兩 心苗

尾及

全

款氏

江戸

全

美濃長良

膳所

加賀

尾品

全

秋^女 龜 岩 嵐 風 專 角 一 利 乙 松 沾
色 翁 翁 竹 瀑 吟 上 桐 合 由 芳 荷

尾及

伊勢麦林と略

伊賀

親氏

江戸

今キ角門人之

今岩翁ノ息之

今キ角門人之

一 一
桐 卯
葉 七

長壽之去末門人之

尾及

守武宗鑑のゆゑに判らばまじく貞徳老人の
花のよれお作を多にほる目この流り詠林
天下此後人一統せしむ蕉翁もあましく西風
詠も翻てまじく一統せしむ此翁も詠
くく道さうんせらち中をまぢの目
兼ふく久後おむにほりれ享無此のこ
もあましくあましく二作三作おあま
峯もも短や一明初のおあましく二
老人略く蕉門の真意を伝へまじく
たひ元極お香風にあましく此翁輩
ゆゑをさう此翁もあましくあましく
まのぢ

今人發句附録

小叢菴選

柳	江戸	伯支
鳴蟬の少	上毛坂木	東兆
兼翁		李城
鳴るも久		緑川
を中引極		奥七
あはれ		久々枝
心		女市
風	碓氷嶺	扇石

雨の月あつても丁々たのこさうか
きりぬあまの限ををほむさうか
その山も高くこもるやけさの秋
茶の戸ぬりもて吹りたるお風
余の茶の枯るに白くまきの毛
今も一も程よれお茶の
炒りたにぬお影る一もさう
折程小伸く満き厥うか
清自乃湖も成さる煙うか
本枯の尾根うらまへて吹おか

江戸

碓

一 蕙
松 凡

奥 竜

歸 春

古 彦

春 水 女

石 明

葛 古

苴 丸

魯 茶

一

ちうにらうんおお多さふ十二女
きりぬこむおまゆさうり 種 瓢
雨を味まに曇るや芦の花
野のやあめさけおあれた作履一
秋もさやまきのあのおまを萩の咲
茶の茶のあまもさうらぬもん墓茶
茶のあまもさうらぬもん墓茶
重なる山や桜乃やうとせうか
さう茶のあつて花大を祿うか
うらた咲花をもさうぬ壺うか

下 縣

三 民
一 桃

五 山

強 武

鶯 支

文 席

素 流

文 虹

月 邪

護 物

白 田

江 戸

董暖や松てふもろく茶乃中
 落しきるるあやそ月もさるる音
 多きを歩さる居てやうて夾の月
 交ふ小窓さの漏るや相一葉
 茶の戸乃さ菊も暖あり旭さん
 まき柳小風おびき目んざうりり
 月影の居いてもさる換りお
 子供も小あゝぬさんとや注連を焚
 碓打方成さうゝお旅茶了か
 雞頭や去もおりちう小日のあか

信 白田
 白峰
 柏 泉
 思 月
 文 眠
 橋 月
 梶 山
 島 霞
 櫻 叟
 豊 湖
 上田 積翠
 二分寺

花に名を付さるるや茶お中
 花聴くくもろく秋乃豊くか
 りにささく粟外里おあはゆ
 さめくくと煮おさうやあさう焚
 茶のさも志く侍丁字暖屋ゆ
 古寺中朝も侍居く百合の花
 待方りて文も月を待おゆ
 坂昔少小山風おさる舎りか
 花乃雪人の袂にほよ安ら
 中掃ひと風も吹あり去葉

一 窓
 和 角
 祭
 羊 山
 易 足
 鷹 山
 如 雲
 尚 堂
 確 月
 成 續

夏の月一おに余る歌うか
美る日お強う〜ぬ柳りか
仮幼小傳知人雨や余古
十六おや菴の掃除乃ゆ居く
蝶飛ぬやま〜ぬ丘乃家
咲花も志〜ぬ林乃木の實ゆ
紫にち信増信益お夕ア〜か
〜定〜と高お日和中疎の歌ぬ
長〜おを志〜ぬ〜高の舎ぬ
権乃公志と〜花乃山路小

信

上田

茂什 谷在 文雪 九梁 芥翠 兩聽 文雄 公山 相居 林霞

三

飛〜小雲美〜山家アぬ
花に志〜ぬ〜高も花小高小亮
幸山の相〜え〜高時雨〜飛
高橋に志〜ぬ〜高の雨
山乃月光高〜ぬ小高〜ぬ
口切の扉〜高〜ぬ〜ぬ
高橋知人山あれぬ〜ぬ
〜ぬ小〜ぬ〜ぬぬぬぬ
〜ぬ高〜ぬ〜ぬぬぬぬ
〜ぬ高〜ぬ〜ぬぬぬぬ

江戸

信 上田

月畝 壽幸 高橋 木遊 五調 大梅 百丈 千旧 李人 羊休

笑ふはあはれもあはれ虫乃事
 赤霞よりくしゆをこぼぬ小米花
 ちりちり寝衣をきり女郎花
 月夜を何処まで伸てゆふあは
 しの風おほまてのまする念衣うか
 ひろそりとあそびる月おきりり
 卯月降や草踏ゆふあはの偏
 月とく月あき草おきよあま久
 ち川雪や有は伝ある鳥川
 夢いかにたれ秋やあはれや井路山

信上田

益尾

江戸

信坂本

四

買甲 泉滝 歸年 椿老 茶靜 如水 兩紅女 禎雅 珠末 文歳

月小き二人にせりし踊了事
 楓ふも葉ふも淋く冬ぬ山
 栲瓶に袖ひらきき草蒲賣
 沢山小りれれ目出たき燈籠か
 一枚二枚をそのは梅の月
 ちり物とあはれあはれのあはれ
 簾より肉へ雨あはるをゆふあ
 中々小菫のちり傳月一枚
 手影を移しききき中秋の水
 何処よりもあはれあはれ友

井谷京

戸倉

細哉

鶴兄 弓我 百河 八朗 月挂 春朗 衣翠 逸芳 片溪 桃儿

さらさらも二日折柳うか信
 何処らと存落てお有ん秋の水
 蜀黍おききくくもくろ菴の秋
 夢さくあくとせの山月おたけの月
 梨の花咲や先祖の百年忌下甘曾我野
 押りくく後にゆきを年お布信
 ざくさおおはももも枕楳の上
 ちりくくくに福を兼くく給うか
 待くくくくく秋やおのきき
 山。月おあつくる里の男お花か

五

化細撰 桂
 五 宝
 大 樗菽蔕
 明 き上山田
 西 塘
 逸 喜信
 彌 天
 柳 玖
 安 聖
 西 菜

拈芦やうくも東風のうらおりて
 掃よせくく未練の起る様うれ
 年をく種くく信堂まぐくあはくく江戸
 夷西やくくくくもくくく人のみる信垣料新田
 くく言おおおあにそまる流まうか
 鳴くおお何を安おくくく来立
 原中や人のおりくく秋の暮
 折人ふおくくく菊の九日か
 寝おおお有くくくく中破の家
 四方山小秋あくくく月おお

史 弄
 英 丈
 素 心
 吉 舟信垣料新田
 孔 左
 素 毛
 其 明
 良 歌抗瀬下
 一 胡
 既 率

以りてまをりつれ秋を被るを成
 唱かじおお一おあくるふる也
 草に〜もあくる菴の小菊也
 菴のや風まけもさぬ山の草
 何るもあにう〜も〜も〜も
 盈さ〜もあも苦小せに衣
 靴小も苗ももあ〜人探乃步
 花の雲あ〜何知うお〜らん
 曇るあ〜心〜も〜も〜も

信 杭瀬下

江戸

信 善光寺

文 耕
 堂 益
 吳 融
 長 莊
 白 堂
 進 齊
 櫻 居
 換 鸞
 兎 洲
 古 菱

六

中 植る口や中植るふの像
 大切な家をめぐりぬ中のも
 朝起のあ〜〜〜〜の葉也
 白苺子のも柄〜も〜も〜も
 竹のあ〜も〜も〜も〜も
 草のあ〜も〜も〜も〜も
 葉のあ〜も〜も〜も〜も
 葉のあ〜も〜も〜も〜も

皁 齊
 武 曰
 叢
 龍 池
 梅 窓
 蕙 園
 柏 溪
 竹 翁
 古 玄
 緑 菴

吹るる巖をく流るる汐末の形
彼初に入山海一草の足も
玉川の裾も川は是杜の
沢山を秋よ家もちる家乃後
砂自やふ葉は家のみりし後
友連て望月も又斗よ小松
植徳は陰小葉をく山家外
歌も一く植る程はる山田の
似く山のりほもさ中ふ二月に
あふよと曳て淋れん雪もさうに

信 善光寺

五竹

松翁

圭岱

伯希

雪頂

白理

挹芝

可厚

梅温尼

東翠

七

横山

檀田

くく甲女後向けより秋乃山
見ぬ山を初に作る時西うれ
陰りの陰もさうさう葉乃月
吹く程小葉をさうさう平梅の花
蒼おあのを小色あり梅やま死
陰る来る雨小それりあうさ
家もさうさう葉はさう山路外
葉もさうさう山く鳴二月に
あふよと曳て淋れん雪もさうに
松翁もあふよ時西女即花

江戸

思月

雨洞

箱清水 松嶺

白窓

一鬼

春雪

可月

小鍋 龍石

白危

應々

風はをこころく冷きは後秋信 戸隠 竹窓
 宵もや寝違延くくえりあふる 碓西
 蒼天やまの影あふる如月 蓬園
 菟弱のころまに氷る月夜白田 春舟
 雪や濡く侍まきく清の入京 蒼虬
 山のおの明くぬくあり終りの夢江戸 荷乙
 まきを枯くえくまきく深の夢 松井
 候くまきくあまきく菴おきむさうか 千之
 外萱のまきくく空くく十三幸雄
 え如の夢くてもちくくくえの花 叢鶯

九

夫立や梅ころ公らくくく信上田 花瀧
 市も旅如き月も旅あれ山の月十輪寺 冬扇
 縹あくも皆まきくくやまきくく六川 白兔
 松吹く風も森入る籠稻荷山 竹摩
 糸白く福火を焚く如く山石村 白芥
 起るくく伊吹をほめる友の月篠井 牛堂
 葉お花や入日きくあは根根越中 貫奥
 田のまきく柳くく天の川奥 為子女
 洲崎くくくくく米沢米沢 柳
 未くくくくくくくくくく雄鳥

田雀もぢく時もてのまよるの境
 猶もくもさかや東の月
 落るまのいもて飛ぶ暖る
 月にくらゝ家も指さる尾花也
 山やまををいもに雛子の写
 海草のわらゝまゝく来ぬ月
 古里をよめ知りも光初日
 卯の電光傳も久くよ核が
 家前も梅もくまゝく光乃木

追々追加

銀海
 東升
 三思
 其笑
 鸞黄
 椿海
 以吉
 三桂
 碓嶺

以中いむの〜白縁 吾士の撰
 三思也くあふ吉人 吾か知 縁ま
 け年 三々 七回 の忘 尼ま 南と
 作善 供 善の のあま 小ま の庵
 三 人 持ま 上ま 三ま の煙 也く
 世ま 孫ま 人 少ま 三ま 三ま 三ま 三ま

